



~ 13
4055
4



門へ13
號 4055
卷 4

仙討天貞東錦繪実記卷之七



目録

倉光小次郎江戸轅事
并四方の里小於て淑洲指南の度



大正十年八月九日
本大學出版部

仇討天貞東洋繪実記卷之七

倉光少次郎江戸へ行く事

并し五百の里より於て羽州指南の度

愛子こ倉光少次郎この歌がけ度のさいあん

天てんのちちるとささこひとやしよんん

ままとまななづづののりりととちちるる事事や

りりととぬぬむむ事事ととぬぬぐぐるるのの事事

せんもんどくごうのんが相せしちかきうち
せん年大新流か相せしちかきうち
に大あるさいあんちうべーとソビ
しもまことよ二千圓の放生會の功
かよよつてその身ははくごのいあー
とソくごもろめれはー古くとも
れあぬたびはあひじきーハ
りそれちるあまのうくありさま
バ七次師とちうらざらるのこごごひり

で合一ま川江戸へ出て古々のやうに
もきく何とせんとい日二日ハ何と
よいぐハあかん深きあつちあて
たがくうりたれが服業せんも
なびの事なれが思ふかひるく
新けしつて石自由ありちう
よ常州は百の里よ名湯のちう
とゆあよび是たれつととそふを

くづのりるふ海^{うみ}より六七里^り乾^ぬの
かこりては^い山^{やま}を^いけ^ぬね^まこ^らふ^ふ豊^{とよ}
饒^{にぎ}の^う一^つ々^つして^て家^い敷^ぢあ^まよ^そは^ら石^い名^な野^の
りりとしひは^さて^てり^らと^まく^は石^い名^な
の^さ里^さと^号号^{ごう}り^らる^この^さと^海海^{うみ}は^むじ
坂^{さか}の^うへ^田田^たむ^らら^磨磨^ら東^{とう}夷^い征^{せい}伐^{ばつ}の^れ
り^らら^け星^{せい}よ^あら^らる^くり^らり^らら^らか
大^おり^らら^ら氏^{うぢ}の^あら^らち^とり^り

て^らら^らの^あら^らた^らら^らり^らその^さ里^さの^あ
長^{ちやう}と^たの^さか^の一^つら^らら^らけ^ら陸^{りく}ま^ら
り^らら^らひ^らら^らその^こら^ら長^{ちやう}して^て家^い
富^{とみ}さ^らら^らの^さ里^さの^{ちやう}長^{ちやう}と^あり^ら子^こ孫^{そん}繁^{はん}
茶^{ちや}ら^らして^て今^{いま}士^しあ^らく^らら^ら田^たむ^ら
と^のり^らて^て氏^{うぢ}と^して^て所^{ところ}は^田田^た村^{むら}や^と
よ^よび^びて^て耕^{こう}作^{さく}と^もと^して^てく^くら^ら居^い
ら^らら^ら石^い名^なの^さら^ら山^{やま}よ^り温^{おん}泉^{せん}あ^らて

諸病を治すは神の御心
よりてと運を遠境より人來りて
從泉よ入りのおろくまことぶら解業
の境ありらるけし次第に濕病を
やまらぬけふはたぐぬけてまを
らる旅宿のとり入湯して
養生とくまらるる思ふべしとす
ろよまきうしよあよびたりあうらよ

同く入湯せしものあつくと
やまらぬけふはたぐぬけてまを
らる旅宿のとり入湯して
養生とくまらるる思ふべしとす
ろよまきうしよあよびたりあうらよ

れ々々が何れと云く山次郎よとひらり
きよあふづぐこの人よとていづきり
ゆら〜ゆらやさぶりて着き人の度
あれが仕官のゆらゆらげゆらとる
ね々々ふ小次郎あ〜〜
羽川山吹も店た糸糸家来ふ合名光
弟書と〜のれ次男よとて小次郎と
〜の〜とゆざいゆるよ私奉一高直

同國きは〜よ見物あふ〜ゆや川
途申はたひて酒あ〜ののあ合口端
よれよぶあ〜のの〜せり〜
扇せりゆ〜きり〜
中よ親書右の〜とま〜とけ侍
よゆら〜き比真の〜
大ま〜不真仕國〜
あぶ〜の仕合母方の祖又同家

とどむりたる白くねよのむぐんなるがど野僧
りせこやとと意と海は中々れば
中次郎大まきよよろこび私事いたぐ
りぬりそるあーやいそりりの身の上
あまきバツくもあせよあつてつひ
大なるの骨とこげむを金しとそれ
より蓮花院はいつくしてああや
るく返るあせーあまは中次郎が諸
鹿子秀で遺文あつたこの法原あひ
よこれを稱し村役人あどとらあめ
る他のと海の指あをぞあーし着き
そのよハ海術系術指あどそのこのむ
とらあまよつてねしれを村中あま
よその教し石目よ安んはねのしきなる
中次郎ハ法原の厚恩とやんとつて
とよもつて蓮花院のゆ氣あつと念

以よぞにけり くらぬはけり 市代官所
うして伊奈松はまどのま死して
あじらの庄やハ代々今世して坂上
伊奈をまとして一村の長にして豊饒
よくふりしるる山まもりの田村將軍の
末流にしてソ白の伊奈をまとして
の細名と豊彦と号せしがれが
又伊奈をまとして山がりとぬと相書
山傳してたのこたるふゆる山
中へ入て炎女よゆひもあつて家
傳りぬき伊奈とて一子とあり
りる名と豊彦とよびりるが伊奈
むらして山中まありぬ伊奈の白子豊
彦が娘まとしてけりしはくはし
功名りん事ものげりし家傳
の薬法とてかけし後何とかくし

ぬさればこの豊を長の後山申妖
怪と退治しそ名と退治よあるこ
黒利將軍よりそのゆびこして
永代免許のありとたむり子
添お給して連綿多りまことよ
代しあきまの家よりして世人々
の殿とぞ移しつら給よ倉光少六
帝ハ蓮花院の世話をのつてふ孫

拵をとりとど先河洲の穂古を
よ日く入門のののちあき繁昌
これつづきののちあき道場
とより多く穂古あこしりるま
よソ多ハ少六帝と先生とよをれ甚
安んよくらしつらぬの目
蓮花院よりあり内外勤仕
雨の日雪の夜のほきくま其答るど

うち連^{れん}弁^がと僕^{わが}やーのーのーの善^{ぜん}
しんらが^{しんら}尚^{しやう}村^{むら}の長^{ちやう}坂^{さか}上^{のうへ}に^に命^{いのち}を^をま^ます
基^{もと}石^{いし}と^と石^{いし}の^のこ^こで^で連^{れん}飛^ひ院^{いん}う^う集^{あつ}り^りら^ら
ゆ^ゆへ^へに^につ^つと^とな^なり^りく^く少^{すこ}公^{こう}命^{めい}も^も祐^{すけ}ん^んど^どり
よ^よな^なり^りし^し母^{はは}の^のま^まを^をく^くし^しん^んの^のあ^あく^く楽^{らく}
は^は胡^こ夕^{せき}あ^あ合^あり^りる^るゆ^ゆ少^{すこ}公^{こう}命^{めい}も^もは^は命^{めい}を^をま
か^かく^くま^まり^り基^{もと}石^{いし}と^とか^かあ^あみ^み夜^よよ^よ入^いま^まば^ば止^とる^る
あ^あど^どー^ーて^てる^るん^んど^ども^もな^なら^らあ^あく^くよ^よに^に命^{めい}を^をま

か^か妻^{さい}は^は回^{わい}村^{むら}に^に命^{めい}を^をま^ます^すと^とい^いふ^ふの^のむ^む
は^はあ^あり^りし^して^て去^きる^るゆ^ゆこ^この^の母^{はは}命^{めい}を^をま^ます^す
あ^あら^らし^して^てい^いふ^ふん^んど^ども^もあ^あく^く妻^{さい}婦^ふ
あ^あつ^つま^まし^して^てい^いふ^ふん^んど^ども^もあ^あく^くし^して^て
婿^{むこ}う^うし^して^てい^いふ^ふん^んど^ども^もあ^あく^く女^{むすめ}あり^り
あ^あり^りけ^け又^{また}命^{めい}を^をま^ます^すと^とい^いふ^ふん^んど^ども^もあ^あく^くし^して^て
か^かあ^あら^らし^して^て去^きる^るゆ^ゆこ^この^の母^{はは}命^{めい}を^をま^ます^す
り^りら^らが^が回^{わい}村^{むら}に^に命^{めい}を^をま^ます^すと^とい^いふ^ふん^んど^ども^もあ^あく^くし^して^て

然しか子こあらくも娘むすめをも人ひとのりりり—
 とと表あらわ子ことと—
 娘むすめよりりやこをも家いへ警しやう成じやう
 ゆゆぐぐりり後ご者しや—
 七しち信しん也え才さい—
 痛いた死し—
 ぬぬ春はる子こ又また帝てい在ありますはらはつつ一ひと女に二に男おとこ
 ととあらわらせし—
 惣そう所じよのむすめとは帝ていをもままうう
 —
 男おとこ子こもも人ひとのりりり—
 八はち年ねんとと六ろく
 又また帝てい在ありますはらはつつ一ひと女に二に男おとこ
 一ひと年ねん—
 てて家いへ事ことをもんもんははぎぎせせとと—
 —
 男おとこ女に色いろ欲よくのむすめははりり—
 帝ていははいいくくああるる因いん縁えん—
 蓮れん花げ院いんのむすめをもんもんははぎぎせせとと—
 古ことと—
 —
 安あん

たゞさうしーゆくまで大合たいがっしーて
まじらぬやよ入いりてあとり燈ともしびのものと
よよぶらして夜のまじらをとまらりらら
がほくぐぐまじらくはくはくはくの事
どもあひひがしーこれこそ智ち居い家け
まおつてふ一二とかぞくらるるもの
次つぎ回まわるるまじらるる業わざ周しゅうあれバと
てかくのどしーの事ことありはああ

知しまぬ農のう人にん高たか丈さうままむむむむとれりし
をかめりくづらるる合あ力りきとくけて
生なま害がいと送おくら事ことのことささよよこれ
まじらくはくはくはくの又また傷けがハハ天てんも照あつつ現げん
ゆれまがりのしりらるる不ふ言げんよゆら
はて突げつつ天てん災さいあしてかく今いまりよ
あらびてあ石いしのいしままけゆりさる
らら天てん運うんようようままの時ときをを

ゆきとちびり〜とていへり〜とていへり
あ〜ちのしるべいあ〜とていへり
〜とていへりあ〜とていへり
むゆ〜とていへり〜とていへり
ま〜とていへり〜とていへり
業とていへり〜とていへり
ちかくハ慶長の比雲が原の一戦
は石田治教少輔三成ハ官ハ臣位
侍従よ〜とていへり西ハ二十万騎の大將
〜とていへり毛利隆津三ハ花江田少将
そのちとていへり〜とていへり
家臣の〜とていへり〜とていへり
のちとていへり〜とていへり
家臣の〜とていへり〜とていへり
そのちとていへり〜とていへり
〜とていへり〜とていへり
〜とていへり〜とていへり
〜とていへり〜とていへり

多岐を捕のちよびしりぞくまし 狐辱成
京於よこすし 嶽つ大海よかする
事これまろくくまが 逆謀あり
てそりりこのはしるまきくも何んぞ
あま多くも神君の内智謀まよ
む天運の徳よ海にあらぬつらう
又百の略とつて西國二十百の大
故ときりあし 一海にあらぬ人か
ちがう 智謀のあまよふふりふん天を人と
しりて徳を人よ海にあらぬのあま
んゆいせいしるまき 申の中の中の何り
さしあやとせむとくせんトくくく
よはし師ちまか妻の意あ海しうち
くはそれくく危せんしる何りさる
るればこれぞ一時の管あるちあかり
あし 志を奉のうのこいよべり

又更またよちのまゝに後あとをひらきあふまたに
悪わるいんんをまのまのて夜よをたのむ
せんねびんのあをあをののたるたるま
ざざと後あとくくわわりり
かかををかかくくはは師しををままかかるる
すすととううぶぶののびびんん
だだゆゆりりささめめハハああててままあり
りりらら事ことぞぞののあり

仇討天貞東洋繪実記卷之八

目録

横死の事

- 一 蓮れん花げ況げん日ひ侍まろ真まことのの事こと
并な田た村むら又また師し左ひだりのの横よこ死じのの事こと

仇討天貞東端繪實記卷之八

蓮花院日待貞の事

兼田村又市乃由横死の事

又小常列^{まこと}は^{ごうり}方の^ま々布^{ごうり}去^ん村^{ごうり}蓮^ま花^ん院^ざと
い^{しん}ふ^{ごん}は^{ごん}ま^{ごん}の^{ごん}一^{ごん}寺^{ごん}ありて^{ごん}安^{ごん}山^{ごん}絶^{ごん}列^{ごん}
根^{ごん}来^{ごん}寺^{ごん}覺^{ごん}範^{ごん}上^{ごん}人^{ごん}の^{ごん}弟^{ごん}子^{ごん}是^{ごん}範^{ごん}上^{ごん}人^{ごん}
の^{ごん}弟^{ごん}子^{ごん}是^{ごん}範^{ごん}上^{ごん}人^{ごん}の^{ごん}弟^{ごん}子^{ごん}是^{ごん}範^{ごん}上^{ごん}人^{ごん}

とつよ人との東へひりまのありふ
けは石の心よ一寺成らん
代く相傳つてし身よこつて十二世
を注てざる英ともなるか法系とら
て慈悲あふかりそちのあら人か
る小次帝とぬく世さこつてくれ
しよハ安ん身の身となりけり
るよけ寺へしらのによりし村申安

今のとちよふ又九月の二月廿六日乃
豆比の日徳と身なり一寺傳ハ朝よ
アして大寂吾と傳護してちうに
よあさりルれバも中のみのもか
お徳の施とつと持系一この由経
よ何れてゆれゆひて降ら奉るる
か寺よも系傳のそのよハ一汁一菓の
うけ合と出し一徳もはらうちよ

りてゆきびくものしとる事あり
こまこと年くの恒例として各々
総氏のものどもやで新古上下のへ
どそなく是もしせりひてせつ
夜ハ石礼誨といはてことありされ
ハあちの長坂上は帝をまも今
日蓮花院の日中ちちるあちゆよく
てやそそく一叙父又帝は其か妻

あちびく堤勇主人と同居一普代
の家来ハ藤とくは當年十八より
ありたりはとやうものとふは
蓮花院の日中ちちるあちゆよく
よをては言山のものがり
そやだ殺着しそとけりもれがお
のしそな符は紙よりひあり
あちふや申の刻はとくもあり

はしあつとは師をまかせり
とあひをやらせりやとらう
のやふらうづのころふ少次師ふ
らくはありこれには師をまどの
よりふ少次師ありとこそい
よ妻つばは夫あきよあどらきむくり
あきとこそこのうよ座ざ一一夜や申まう
といひ夫あつとのあぢあるふい
て

あつと
きりたあふやけり
うりそりしりか
ををああとといいふ
はくぐ女がわをうちおるがこれ
はいふと曲まがのあ
ころよりころのけハ千づらの
あつとせらあせり
師をまどのあぢあるふとぞん

さうさういふまにせよふかしくびまハかき
まじこあまのこハ腕のこ〜よそ
ありとあまのこハ腕のこ〜よそ
帝ハはろのこ〜よそ
女ハ子こがこひと〜せよそのこ
登城とハ何事ぞあまのこハ知事とい
ふま〜よこ〜とみぎり目鼻
のりい〜と〜ち〜る〜ぞ一

〜〜〜がそのま〜〜ま〜ハ〜
てたりこののあまふ父又母帝在也
大ひよあまのこ〜目とさる〜
と〜び〜で〜あ〜げ〜〜カ〜セ〜ゆ〜こ〜ろ〜
浴と〜川〜さ〜げ〜あ〜合〜く〜と〜大〜こ〜ろ〜何
げ〜さ〜う〜ぞ〜く〜の〜入〜り〜〜と〜こ〜ま〜は〜
と〜ま〜が〜あ〜〜と〜び〜あ〜ま〜ハ〜少〜次〜帝〜ハ
叶〜と〜と〜あ〜の〜ま〜が〜み〜せん〜の〜こ〜ろ

よつらー大ひをみきりーらんよ
うつてととーてよぞあらびまは又席
左ありハやりちつさげやれく登り
織ぎよーと何とよはびひてのけ
ソらよし次席ハちてのてく
わつてととーてよぞあらびまは又席
さらくらー何とよはびひてのけ
とだんよりりがり々らとよりはとと

もつてくらりれハはりさらはよ
昔むかしのちるくぞあちり
々ら又席ハちてのてく
あひららが老のあちり
もあちりくあちりさらありのあちり
の徳さらハし次席がらんのまよ
もあちりくあちりさらありのあちり
とだんよりりがり々らとよりはとと

又市五郎の存のちをとりつけ
てきりこめばうんと斗は海軍の
老人少将市がよへまゐりふいふ
次市ハ組進一りところへてかよ
まうせてるゆへ一太戸破りて
一さんよこがまをさしてよげておく
このそとぞうふあいのものてんでよ
れまてつけおまどぜんびもこうぬ

ちんのやと盗人ふと大ぶるうら
斗うてうゆさへさるごをせやる
れりしむき人の中男よと
こゆだきしりりの櫓とゆんごんよ
うらしとるし眼よのちおまは
け火よとるくこゆだきとんでた
焼火とらうてうらてとこれだ
いうよ年よとる又市をゆら

くまをせしりたりけきうどらうとき
くよりし蓮花院よりありあまふ
のどのどよめ命をたつがてあふり
ときしよりしあひしに命をまか
家より来りしらふに命をまかハハ
ゆらともし先をよて返り来り叙文
又命をたつが命をたつらゆりさぬ
をよてたひよあどらき何もの仕

さぶるるやはれーやまらしちやあ
ましづうくかくるまも款とうしで
たくまきくとおどりくちがまあ
ていうりらる命よこりせりてあ
まありかくはらるちよ一家ハソ
よあまらび能死あ人中よし一家
れば命をまかしよの命をま
よりらハを命又命をたつ核死ま

むさとうつゝつれれば後人^{ごみんぢうじん}中
ら^き夢さげり何ぞそあは^解探^{けん}使^し
のいのこつゝつれれば^作し
後^ごされ^るま^まバ^はは^はく^く何ぞが^がく^く
と^{へい}平^{へい}依^い一^一あ^あの^のく^くん^ん一^一と^とま^まち
ら^らが^が何^何師^しあ^あま^まハ^ハ妻^{つま}の^の快^{さい}意^{いき}を
どう^{どう}さ^さび^び祐^{ゆう}や^やよ^よ入^いて^てさ^さら^らあ^あが^がら
夜^やぢ^ぢんの^のよ^よう^うは^はと^とさ^さひ^ひ又^又席^{せき}な^なら

どの^てあ^あよ^よくれ^れぞ^ぞも^もん^んあ^あぢ^ぢ死^しせ^せる
あ^あの^のさ^さき^きと^とさ^さひ^ひら^らは^は妻^{つま}ハ^ハを^をら^らめ^めい
の^のの^のあ^あら^らめ^めハ^ハ又^又席^{せき}ハ^ハあ^あの^の格^{かく}死^し
筈^{はず}ハ^ハさ^さら^らハ^ハぢ^ぢか^かく^く家^か内^{ない}さ^さら^らぢ^ぢう
せ^せ一^一ら^らハ^ハは^はと^と一^一ハ^ハは^はく^くむ^むと^とあ^あら
ぢ^ぢう^うら^らび^びと^とさ^さら^らぢ^ぢう^うあ^あら^らり^りみ^みい
ら^らり^り中^{ちゆう}次^じ席^{せき}は^はの^のく^く艶^{えん}書^{しよ}と^とれ^れく
り^り一^一や^やう^うい^いと^とあ^あら^ら夜^やぢ^ぢん^んハ^ハさ^さら^らぢ^ぢう^う

まのよハ己が家ヤよ暮まりるたて残のこを
のこしそのせりまうでまうらうまてん
とアミしのとやまつしまにまる
はあまらるるんんやあまらるるんん
らあまらるるんんのよしらららままの
一そのこらまあくあらとのちぢま
ららやらてよまいとまらり

とまららてあまいたまいとあらら
そらららをまままのまままらららら
してあらららままらららららら
検けん使しのはがあらららららららららら
らららららららららららららららら
らららららららららららららららら

仇討天貞東洋繪寶記卷之八
五十五

五十五

